日蓮大聖人御書全集

阿仏房御書

あぶつぼうごしょ

（宝塔御書）

ほうとうごしょ

新版
1732
〜
1733

阿仏房御書（宝塔御書）

建治2年（'76）3月13日＊　阿仏房

御文委しく披見いたし候い畢わんぬ。そもそも宝塔の御供養の物、銭一貫文・白米・しなじなおくり物、たしかにうけとり候い畢わんぬ。この趣、御本尊・法華経にも懇ねんごろに申し上げ候。御心やすくおぼしめし候え。

一、御文に云わく「多宝如来涌現の宝塔、何事を表し給うや」と云々。

この法門ゆゆしき大事なり。宝塔をことわるに、天台大師、

文句の八に釈し給いし時、証前・起後の二重の宝塔あり。証前は迹門、起後は本門なり。あるいはまた、閉塔は迹門、開塔は本門、これ即ち境智の二法なり。しげきゆえにこれをおく。詮ずるところ、三周の声聞、法華経に来って己心の宝塔を見るということなり。

今、日蓮が弟子檀那、またまたかくのごとし。

末法に入って法華経を持つ男女のすがたより外には宝塔なきなり。もししからば、貴賤上下をえらばず、南無妙法蓮華経ととなうるものは、我が身宝塔にして我が身

また多宝如来なり。妙法蓮華経より外に宝塔なきなり。法華経の題目、宝塔なり。宝塔また南無妙法蓮華経なり。

今、阿仏上人の一身は地・水・火・風・空の五大なり。この五大は題目の五字なり。

しかれば、阿仏房さながら宝塔、宝塔さながら阿仏房、これより外の才覚無益なり。聞・信・戒・定・進・捨・慙の七宝をもってかざりたる宝塔なり。多宝如来の宝塔を供養し給うかとおもえば、さにては候わず、我が身を供養し給う。我が身また三身即一の本覚の如来なり。

かく信じ給いて南無妙法蓮華経と唱え給え。ここさながら宝塔の住処なり。経に云わく「法華経を説く処有らば、我がこの宝塔その前に涌現す」とは、これなり。

あまりにありがたく候えば、宝塔をかきあらわしまいらせ候ぞ。子にあらずんば、ゆずることなかれ。信心強盛の者にあらずんば、見することなかれ。出世の本懐とは、これなり。

阿仏房しかしながら北国の導師とも申しつべし。浄行菩薩うまかわり給いてや、日蓮を御とぶらい給うか。不思議

なり、不思議なり。この御志をば日蓮はしらず、上行菩薩の御出現の力にまかせたてまつり候ぞ。別の故はあるべからず、あるべからず。宝塔をば夫婦ひそかにおがませ給え。委しくはまたまた申すべく候。恐々謹言。

三月十三日　　日蓮花押

阿仏房上人所へ